

「お 話」そ の 方 法 と 展 開

—— 本学附属幼稚園の実習報告を中心として ——

鵜 丹 谷 三 千 代

I 序

現在は映像文化の時代ともいわれ、ことに子どもとテレビとは切り離せなくなってしまう。それだけに、言葉による、口から耳へ、心から心への語り聞かせ、読み聞かせのいわゆる「お話」の場が、学校でも幼稚園にも勿論家庭でも大切なことはいうまでもない。

昭和39年に制定された「幼稚園教育要領」に童話の意義が要約されている。

まず、情操を育て心情を豊かにすることがあげられる。

その意義について

- 1 望ましい対人間係や正しいものの見方の基礎を養う。
- 2 幼児の心を躍動させ、豊かな想像力や空想力を養う。
- 3 情緒の発達を促し、豊かな情操を養う。
- 4 話を聞く態度と美しいことば使いやよい話に耳をかたむける。

以上の背景にあるのは、幼児の言語活動が書かれた文字を通してではなく、話しことばによって、口から耳へと学ぶためである。

「童話」という名称は、古くから「児童向きのお話」と解されていたが、明治期に入って広く普及した巖谷小波の作品を「お伽ばなし」と呼び、年少児童向きのお話を意味するようになった。

彼は、1891年（明24）1月「こがね丸」を出版したことにより児童文学の開眼をなし、お伽ばなしの世界を開拓したが、1898年（明31）大日本婦人教育会ができ、毎月一回永田町の華族女学校（現学習院女子部）の幼稚園を会場として、お伽口演を担当した。これが最初である。

1903年（明31）横浜のメソジスト教会に、久留島武彦が「お伽倶楽部」を開いた。彼は関西学院在学中、キリスト教伝道隊演説を行ったり、日曜学校の生徒に聖書の話をした体

験から、巖谷小波のお伽口演に共鳴し、小波と組んで幻灯をもって全国を口演した。そのころ、1908年（明36）10月、牛込に東洋幼稚園を開き、1910年（明43）4月神田神保町に移った岸辺福雄は、巖谷小波のお伽話を保育教材として取り上げ、彼もまた口演で全国を巡回するようになった。この小波、武彦、福雄のわが国の童話口演史上の足跡は、非常に大きく、「童話界の三大家」と言われた。

1918年（大正7）ごろからお伽口演が童話と呼ばれるようになり、童話口演は各地にもその研究会が盛んになり、児童文化団体主催の童話文化が日曜ごとに開かれるような盛大さであった。

同1918年（大正7）7月に「赤い鳥」創刊

1922年（大正11）5月には、児童文学と口演童話の研究とその実践に裏付けと正しい力を与えることを目的として、日本童話協会が創立された。1915年（大正4）には、東京高師の在學生と卒業生とが一体となって、大塚講話会という名のもとに、童話口演の研究と練習に努め、日本全国にも巡回し、「実演お話集」全9冊を出版するなど、口演童話界に貢献するところ大であった。

このように、口演童話は、明治・大正時代には専ら大衆を相手に発達した。当時はマイクロホンなどのなかった時代に、聴衆は200名から1,000名にも及ぶ大きな会場で、小学生から中学生まで、10才以上も年令のちがった少年少女をいっしょに入れた対象に口演することは、大変な技巧と修練が必要であり、会場一杯に響く音声が用いられ、大きなゼスチュアが要求されることは当然であった。

かくして、いわゆる大衆童話が研究され、その話し方が定型化し固定化してしまったが、1925年（大正14）口演童話は、ラジオ放送の開始に伴い、定期的に放送され、研究、実践も行われるようになった。

第二次大戦後、アメリカの影響によって、「幼稚園ブーム」と共に、心理学、教育学熱にあおられて、ラジオ、テレビの番組には毎日、「幼児の時間」「幼児ばなしの時間」などが加えられ、放送されるようになった。

こうして、幼児ばなしが、「幼児ばなし」としての独自の位置をもつようになったのは、その一つは、社会的な背景と、その二つめは、学理的ともいうべきものであろう。

ビューラー^{註1}教授は、幼児期の最大特徴として童話に対する興味と要求をあげて、「童話期」と呼んでいる。

シュプランガー^{註2}博士は「お話の時期という名称は、4才から7、8才までの子どもの世界の姿を暗示している」と、いっている。

こうした点を思いあわせてみると、幼児ばなしはより以上の目的と効果と使命を担うよ

うになったことが次第に理解されてくるようである。

フランスの作家ペロー^{註3}は、1697年に「むかし・物語」の序文に「真理を知る能力にとぼしい幼少時代には、かれらにふさわしいおもしろい物語によって、知らず知らず会得させる」と書いているが、「お話」を通して、人生を語り、道徳を教え、理想を示し、正しい文学への導き手ともなり、言語の発達には重要な役割をつとめる。そして、現在の事実に関係し、また、将来の成長につながる。知・情・意をふり立たせ、自発的に、よりよい精神生活に進ませる深遠な機能を備えているといえる。

では、幼児にはどのような童話が適切か。また、話し方、聞かせ方について、述べてみたい。更にその展開として本学幼児教育科二年生の今淵史代の生活学園短期大学附属幼稚園の実習報告を取り上げて、一考察とする次第である。

II 「お話」その方法

1 話材の条件と時間

大きくわけて、2つあげることができる。

- ① 幼児の特質・興味から
- ② 教育的な意図から

ブライアント^{註4}は、幼稚園期のお話として韻律的なもの、ナンセンス・テール、人格化された自然ばなし、ふしぎな話をあげている。また、カザー^{註5}は、約3才から6才までを韻律的なお話の時期としている。ビューラーは、4才から9才までを昔ばなし期として、いろいろな種類のふしぎな行為、力だめしや困難な課題の解決、結婚及びそれともなう冒険、特別なりこうなものや、ばかものの話などを入れている。そのいずれにしても、幼児に適切な話材を要約してみると、

- ① 明るい話
- ② 美しい理想をもった話
- ③ 正しい人生観を教える話
- ④ 自主独立の精神を養う話
- ⑤ 勤労・努力の精神を持った話
- ⑥ 平和・博愛に富む話
- ⑦ 道義心を高める話
- ⑧ 芸術的な潤いを持った話

など、あげることができるが、保育者は常に幼児の発達段階に応じて、意図的にまた偶発的

な機会をとらえて、望ましい言語活動へと導くことが大切である。

3・4才児は、単純でリズムカルな短い童話を好み、5才頃になると、かなり長い話も聞いてわかるようになる。

まずなにより、お話を聞くには集中力の訓練が必要である。そのために、話し方、聞かせ方の研究工夫がのぞましい。テレビの影響で、感覚化されているので、幼児の興味や関心のある題材や登場人物が出てこないと騒がしくなる。したがって、幼児の理解を得るために、補助道具（ぬいぐるみや絵本など）を有効に使い、視覚に訴えるのも一つの方法である。話す時間の目安は、一般に、

3才児 3～5分

4才児 5～10分

5才児 10～15分

が限度といわれる。

2 方 法

童話作家浜田広介は、「子どもたちに、ものごとを知らせてやろうとする前に、子どもたちが生まれながらに持っているもの——心の動きをはたらかせること、別言すれば、知性を開くに先だって、感性のつちかいを行うことが、人間形成の第一着手となすべきものではあるまいか。こう考えて、わたくしは、童話の使命を子どもたちの感性を誘い、みちびくところに置こうとする。そして、それをよくするためには、作者みずから感ずるものを土台にすえて、素直にそれを書くことである。ほんとうに感ずるものを素直に書けば、それは、そのまま、子どもたちの心にふれていくのである。」と、彼の著作「ひろすけ、幼年童話文学全集1」（昭和45年6月5日発行 集英社）のはじめのことばに書いている。

お話には、二つの心がある。

一つは、この作者の心、お話の心である。

もう一つは、読み手側のお話に対する心である。この二つの心が一つになってはじめて、聞き手側にお話の心が感動深く伝わっていくものである。

話し方の方法の基本は、まず、

- ① 話し手がその話を感動深く何度も何度も読んだか、どうかである。作者の意図が、心がわからないうちは、わかるまで話さない方がよい。作品のよさを伝えることが出来ないばかりか、かえって、子どものイメージづくりに混乱をあたえないともかぎらないからである。

- ② 環境づくり

イ、小道具の準備（話の内容に応じて人形、ぬいぐるみなど）

ロ、部屋のふんいき（彩光，温度，ローソクなど）

ハ、机，椅子の配置や距離

ニ、話し手の服装（話の内容に応じて）

③ 聞く準備

イ、「お話」への興味と期待をもたせる。

ロ、子どもたちを静かにすわらせる。

ハ、話し手は自然にゆったりと。

ニ、導入方法は「ねらい」によって。

④ 進め方

イ、お話を始めたら、道草をしない。

ロ、よくわかることばで。

ハ、適度な声の高さで、はっきりと。

ニ、適当な間をおく。

ホ、途中の質問や雑音でも、話の流れを変えないように。

ヘ、短い文で。

ト、リズムカルに。

チ、具体的な言い方

リ、見せることば（会話のことばで登場者の性格・状態をえがき出させること）

ヌ、ゼスチャ（運動言語として）

ル、と語る（子どもに語る態度ではなく、子どもと語る気持で）

⑤ 話の結末

イ、ゆっくり，調子をおとして。

ロ、ねらいによって，確認する場合をのぞいて，「お話，これでおしまい」で結ぶ場合と，それすらも言わないで，すうと終わった方がいい場合とがある。それは話の内容と子どものその時の状況で自然的に。気をつけたいのは，教訓の押しつけは，かえってお話の効果を弱めてしまうことになる。

III そ の 展 開

1 言語年間指導計画例（5歳）

ねらい	○聞く態度、話す態度を身につける。 ○言語活動を活発にし、生活や遊びに即してことばが正しく使えるようにする。 ○絵本、童話、放送など視聴して、その内容がとらえられるようにする。			
	聞く活動	話す活動	生活のことば	想像する活動
4月～7月	○先生や友達の話喜んで聞く。 ○簡単な話の内容がわかり劇的活動にして楽しむ。	○要求や疑問などをことばで表現する。 ○経験したこと感じたことを話す。	○自分や身近かな人や物の名前を言う。 ・先生・組・友達 ・園名・遊具・道具 ○返事やあいさつをする。	○絵本、紙芝居などを喜んで見たり聞いたりする。
8月～12月	○人の話を注意して聞く。 ○先生や友達の話静静地に終りまで聞く。 ○話の内容を理解しながら聞き、疑問なことはくわしく聞く。	○友達と気軽に話し合う。 ○友達にわかるように話す。 ○クラスの中で自分の言いたいことをはっきり話す。 ○感じたこと、状態などをことばに表わす ○ことば遊びをする。	○日常生活に必要なことばを覚える。 ・当番の順番・交替活動の準備・相談など ○自分から喜んで返事やあいさつをする。 ○身近かな事象の名がわかり使って話す。 ・昨日・今日・明日 ・月日・曜日・天候 ○標識や記号、文字に関心をもつ。	○絵本・紙芝居・人形劇・放送などに親しみ内容や筋がわかり感想を話し合ったりする。 ○ペープサートを作り演じて遊ぶ。 ○童話の本や放送の連続ものを楽しむ。 ○素話を聞いてイメージ画にしてみる。
1月～3月	○集まりの場で静かに話を聞く。 ○グループで友達の意見をよく聞く。	○大勢の人にわかるように話す。 ○よい態度で話す。 ○発音や発生に注意して話す。	○身近かな事象の名がわかり使って話す。 ・自然現象、卒業など ○文字や文字生活に関心をもち、利用する	○話を作り、紙芝居やペープサートにする ○友達と協力して劇遊びをする。

2 「言語」その実習報告

昭和57年度後期幼稚園実習での全実習時における「素話」—ぞうのぶんた—とそのイメージ画

イ. 日案

<日案> 10月29日 金曜日 ばら組 35名 担当者名 今 潤 史 代				
主 題	・素話「ぞうのぶんた」を聞く。 (言語)			
本日のねらい	・先生の素話を喜んで聞き、その内容や筋がわかる。 ・素話を聞いて感じたことをことばや絵で表現できる。			
時 間	幼児の経験や活動	指導上の留意点		備考
9:00	登園 自由遊び	・元気よく朝のあいさつをする。 ・手洗い、うがい、排泄をさせて並ばせる。		
9:50	おあつまり	・元気良く足をあげて行進するよう言葉かけをする。		
10:00	礼 拝	・ボールでの整列がだらけないように気をくばる。		

10 : 20	出席を取る	・出席の返事はいきいきと行なうようにする。	給食数として
	メロディオンの練習 (10~15分位)	・休んだ友達はいるか、それは誰か等を全員で確認しあう。	紙片に記入する
10 : 40	一斉保育	・初めにそれぞれにクレヨンを出させる。ただし、出しにいかせる前に、もってきたクレヨンのふたはあけずに、机の中央においておくよう約束させる。	☆準備するもの
	・先生の話しをきき、約束をする。	・クレヨンを出し終えたら静かに椅子の向きを先生の方へむけさせる。	・クレヨン
	・指示された列の子供からクレヨンをもってきて用意する。	・なぞなぞを4~5回行ない、さいごに「ぞう」の答えをひきだす。	・画用紙 六つ切35枚
	・椅子を先生の方に向けてすわる。	・ぞうについて知っていることを簡単に話しあわせ大きな特徴を明確につかませる。	
	・先生の話しをきき、なぞなぞをして楽しむ。	・ぞうのぬいぐるみをみせて、グループごとに短時間ずつ触れさせるが、まっている子供たちへの言葉かけをおこたらないこと。	・ぞうのぬいぐるみ
	・ぞうについて知っていることを話しあう。	・素話「ぞうのぶんた」をする。	・バケツ
	・実際、ぞうのぬいぐるみに触れてみる。	・子供に緊張感や期待感を与えられるよう、子供の表情反応をくみとりながら、物語を展開、進行させてゆく。	・ビン
10 : 50	・素話を聞く。	・素話を終えたなら、この物語の要所場面についてこちらからの問いかけ形式で確認の意味も含めて答えさせ、そのうち「ぞうのぶんた」を聞いての感想を簡単にきく。	・ほうたい
11 : 00	・先生の話しを聞くとともに、「ぞうのぶんた」について感じたことなどを話しあう。	・「ぞうのぶんた」を聞いて思いうかべた絵を描いてみようと言葉かけをする。	
11 : 05	・画用紙をもらい、よこに用いてのびのびと描く 男児—椅子上で 女児—机上で	・画用紙は必ずよこに使うようにと約束してからわたす。又、クレヨンのふたは重ねるように指示する。	
	・描き終えたら静かに先生のところへ絵をもっていく。	・男児は椅子を利用して、女児は机上で描くように指示し、絵は、自分が思う通りのびのびと大きく描くよう言葉をそえる。	
	・絵をもってきた子は、先生のネームペンをかりてうらに名前をかく	・描き終えた子から静かに絵をもってこさせ、ネームペンでうらに名をかかせたあと、絵についての話しを簡単にきき、うらにメモ的に、その子が話したことをかきとめる。	
	・描いた絵についてのお話を少し先生とする。	・描き終えてもってきた子は、クレヨンをしまい、席について静かにハンカチ遊びをするような指示する。	
	・クレヨンをしまい静かに待つ。	・描けないでいる子には素話の要所をもういちど話しかけてみるなどして、意欲を促す。	
	・先生の話しを聞く。	・全員がとてもよく「ぞうのぶんた」を聞いていたことと、素敵な絵が描けていることをほめる。	
11 : 30	自由遊び	・ずっと座り続けていたあとなので、急激な動きによってけがなどをしないように気をくばる。	
11 : 45	給食の準備	・手洗い、排泄をさせる。	☆歌
	手洗い、排泄	・当番が準備する間、きれいな声で歌を歌って待たせる。	小さい秋みつけた
11 : 55	給食	・食器、おかずの足りない子がいない	

		か確認する。	
		・私語や好き嫌い等で食の進まない子に言葉がけをする。	
		・食器や残飯の片づけ方にまちがいがいがないかどうかを確かめさせる。	
12:20	ごちそうさまのあいさつ 絵本をみる。	・合奏練習にちなんでの絵本をみせる。余韻を残したい内容なので読後に注釈をつけるようなことはしないしておく。	☆絵本 「もぐらの チクタク」 文・絵 舟崎克彦
12:40	自由遊び	・きちんと手洗い（排泄）をさせてから並ばせる。	
13:00	おあつまり 手洗い、排泄	・だらしない整列にならないように言葉がけをする。	
13:10	礼 拝 ①徒歩、1便バス通園児 ②2便バス通園児	・帰りのあいさつを進んで元気よくするようにさせる。	
14:00	降 園		

ロ. お話「ぞうのぶんた」

水 谷 章 三

「園児のためのおはなしカキュラム」 第12集3（宣協社）より、

ぞうって 大きいよね。

ぞうの、あの ながい はなで、ぼいん、と やられたら、おとうさんだって おかあさんだって、いっばつで のびてしまう。

それに、あの ぞうのあし。あれに ふんづけられたら、なんだって、べっちゃんこになつて しまうよね。

どうぶつえんに いるぞうの ぶんたも、もちろん 大きな ぞうだ。

ある日の こと、いつ、どこで、どうしたものか、ぶんたは しっぽに けがを した。

ドデーンと した、大きな おしりにしては、かわいらしい しっぽ。その しっぽの さきっちょのかわが すりむけて ぶんたは いたくて いたくて しかたがない。

ぶんたのとなりの へやの、うさぎやこぐまたちは、いつも 「ぶんたくんは強いから 泣かないものね」と言っていたので、ぶんたはいたくても 泣かずにがまんしていた。

ぶんたは、ながい はなを うしろに まわして、けがの ところを なんども なんども こすってみた。そうしては、ぶるん ぶるんと しっぽを ふって いまに なおると おもって いた。

どうぶつえんが おしまいの じかんに なって、ぶんたの せわを してくれる めがねの おじさんが やって きた。そして、ぶんたの しっぽの けがに きがついた。

「いたかっただろ。よし よし。すぐに なおるさ。ペタペタ。」

ペタペタと いうのは、おじさんが ぶんたの おしりを やさしく たたいた おとなのだ。

「ペタペタペタ。」

おじさんは、ぶんたを ねどこの ある へやにつれて いった。

「ちょいと まって おくれ。ペタペタ。」

ぶんたは、おとなしく まっていた。

へやを でて 行って、すぐに もどって きた おじさんは、大きな ばけつと、小さな びんを もって いた。

大きな ばけつには、ぶんたの ぼんごはん、じゃがいもに バナナに りんご、それに、たくさん たくさの ほしくさが 山もり。

小さな びんは なんだろう。

「ペタペタ、さあ たべな。ぶんたのすきなもの ばっかりだ。」

ぞうの ぶんたは ふがあ ふが ふが、うれしそうに はなを ならした。

「さて、そのうちに。」

ぶんたの おしりの ほうに まわった おじさんは、小さな びんの ふたを とった。つうんと いう におい、くすりの におい。ぶんたは、ふが ふが、はなを ならすのを やめた。へんな においにおどろいた。

もっと おどろいた ことは、おじさんが、ぶんたの しっぽを うしろから つかまえた ことだ。

「ぶるるうっ。」

ぶんたは、しっぽを ふって にげた。

「おい おい。いたく しないよ。ほんの ちょっと くすりを ぬる だけだから。な、いいだろう。」

また しっぽに おじさんの 手が のびる。

ぞうの ぶんたは にげる。へやの かべに おしりを つけて、いや いやを する。

「いいから、な。すぐに なおるんだから、なっ。」

おじさんは、しゃにむに しっぽを つかまえ ようと する。けど、ぶんたは いやだ。

だいすきな おじさんが だいきらいな あぶかはちに みえてきた。

「そおら、つかまえた。あっ、しっぽい。」

「ぶるるるるうっ。」

せまい へやの 中で、ぶんたと おじさんの おにごっこだ。ながい はなを ふり

まわし、うちわみたい な みみを ぱたぱたさせ、あっちを むき、こっちを むき、ど
たどたと にげまわる ぶんた。

その おなかの 下を、くぐりぬけ くぐりぬけ、なんとか しっぽを つかまえよう
と する おじさん。

とつぜん、

「クオオオーン。」

かなしい ぶんたの なきごえが、どうぶつえん いっぱいに ひびき わたった。

おじさんは、あせ びっしょりに なって、ぶんたの しっぽを つかまえて いた。

「ぶんた、なくなよ。ちょいと がまんしな。ほんのちょいとだけ。」

おじさんは、まだ にげようと する ぶんたの しっぽに、ようやく くすりを つ
けて やることが できたのだ。

ぞうの ぶんたも、 ようやく ばんごはんを たべることが できた。

「ペタペタ。」

おじさんは、ひたいの あせを ふきながら ぶんたの おしりを やさしく たたい
た。

もう ぶんたの ねる じかん。おじさんが こしらえて くれた、ぶんたの ねどこ
は、さっぱりと かわいた ふかふかの わらの ねどこ。

どさっと、わらの 上に ころがって、ぶんたは ねむる。ドデーンと した、大きな
おしりに しては、小さな しっぽ。しっぽの さきっちょには、まっ白な ほうたいが
くるくる、くるくる、まいて あったよ。

おやすみ ぶんた。

ところが ぶんたが あまり なくものだから

おじさんは、ぶんたの しっぽを はなしてやった。

「よしよし、わかったよ。ぶんた、くすりはつけないよ。」

おじさんは、ぶんたのへやから 出ていった。

ぶんたは すっかり 安心して のこりの ごはんを たべると わらのねどこに ど
さっと ころがった。

そして すやすや ねてしまった。

夜 おそくなって ぶんたは 目をさました。
おしりのほうが じくじくといたい。ずきんずきんいたい。
くすりを つけてもらわなかったから、しっぽが まっかに はれあがって ぐじゅぐじゅに なっていたのだ。

ぶんたは どうぶつえんじゅうに ひびく大きなこえで
ばお〜んと ないて、めがねのおじさんを よんだ。
「おじさ〜ん、おじさ〜ん、いたいよ〜 しっぽがいたいよ〜、おくすりつけて〜」

おじさんは すぐにやってきて、ぺたぺたぺたぺた ぶんたのしっぽに
くすりをつけると、まっ白いほうたいを まいてくれたよ。

「さあ、これで大丈夫、おやすみ、ぶんた」

ぞうの ぶんたも ようやく ねることができた。

ドデーンとした 大きなおしりにしては 小さなしっぽ
しっぽの さきっちょには まっ白なほうたいが くる くる まいてあったよ。

次のあさ

ぶんたがおきてみたら、しっぽの ぐじゅぐじゅは なおっていて
けがをしたところも あんまり いたくなくなっていたんだって、よかったね。

おしまい

（原作に対して、今渕自身の実習の「ねらい」により、自ら補足していることをおことわりしておきます。）

ハ．子どもたちのイメージ画

生活学園短期大学附属幼稚園 5才児 ばら組・34名、その中から
10名分を以下あげてみる。

※印は子どもと今渕の対話から、今渕がまとめたものである。



写真1 エサをあげてくすりをけようとして
いるところ（かおり）

※ ぶんたくんは子象だからおじさんより
小さいの。ぶんたくんは「わあいご飯
だ」って言っていて、おじさんは「よ
し、いまのうちにくすりつけよう」っ
て言ってコッソリ立っているところ。

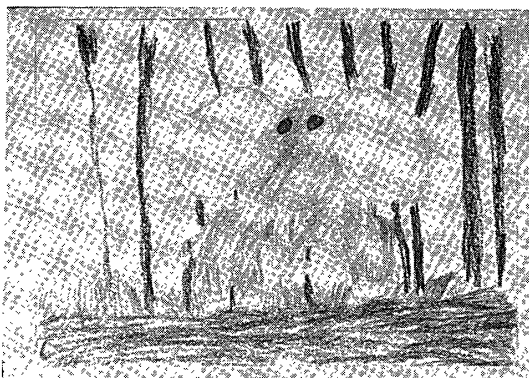


写真2 ぶんた君がおりの中を逃げていて、逃げる場所がなくなって、おりにお尻をくっつけて立ってるところ（さちこ）

※ ぶんた君のところだけおりの棒がないねの意地悪した問いにしばらく考えたのち、自分もおりの中に一諸にいて、おじさんと同じところで、ぶんた君はかわいそうだなあと考えているからぶんた君の後の方におりがあるとの適切な答え。

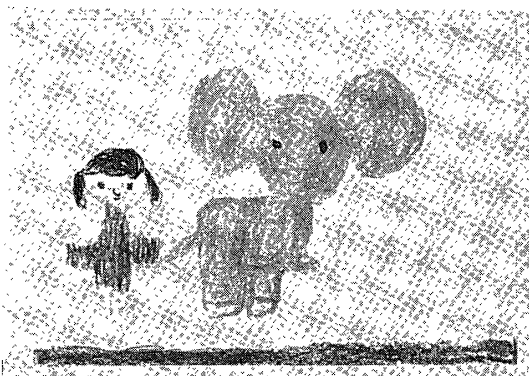


写真3 けががなおったぶんた君（あきこ）

※ 話の中にはなかったが、次の朝、けがが治ったぶんた君のところにまた、いっぱい動物園のお客さんが来て、その中の1人の女の子が「ぶんた君かわいいね」って言ってなでてあげているところをつけ加えての絵だそうだ。

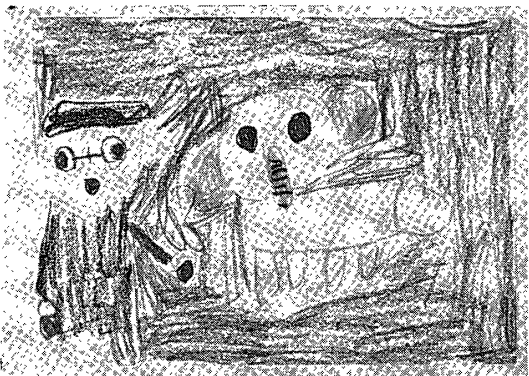


写真4 夜にぶんた君が泣いて、めがねのおじさんがきてくれて薬をつけてほしいを巻いてあげたところ（まきみ）

※ 手に持っているのは薬のびん（赤ちゃんのこと）青い方はバケツで、ぶんた君がいっぱい泣いたからお腹がすいたんじゃないかなあと考えてまた、ごはんを入れて持ってきたの。

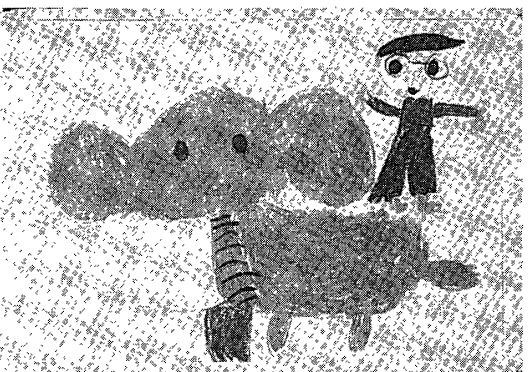


写真5 おじさんがエサをあげて、薬をつけようとしているところ（れいこ）

※ ぶんた君は、おいしいなあと考えているところ。おじさんは、ぶんた君の後の方に行って、ぶんた君が後をみなきゃいいなあと考えているところ。

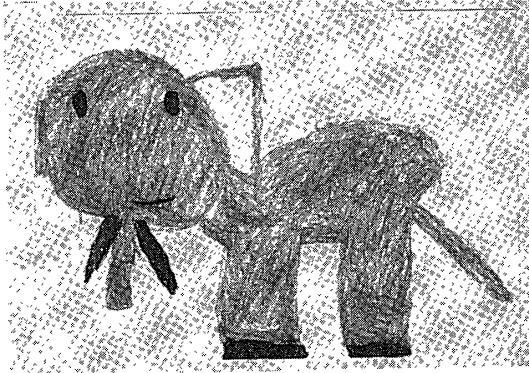


写真6 けがが治って笑っているところ（いくこ）

※ 耳がないわけは、うれしくて耳をパタパタしているから片方の耳は後にいつてるの。しっぽのけがが治ったから、しっぽをふっても痛くないかどうか、お尻をきゅっとあげてしっぽをふってるんだよとのこと。



写真7 夜痛くなって、大きい声で『くすり』をつけて、『』と言って泣いててつけてもらったところ（まさる）

※ ふきだしに『おくすり』のセリフまで入れる思い入れよう。セリフのない黒いふきだしも二つあるが、字を書こうとしたら小さくて書き入れられなかったと言う。『おくすり、おくすり』と書いて泣き叫んでいるところにしまったと話す。象のしっぽは短いとまっ先に話にきた子なのに長くかいてきたので聞いてみると……ぶんた君の首にロープをかけておじさんがぶんた君にのぼりしっぽに葉をつけるんだけどしっぽを短くかいたら、おじさんがぶんた君のおしりからすべって落ちそうだったからしっぽを長くかいたとのこと。又、ぶんた君は子象だけど、おじさんよりずっと大きいんだとも。

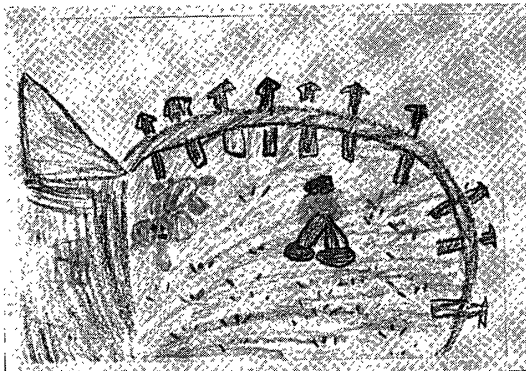


写真8 めがねのおじさんとぶんた君が追いかけてこしているところ（ひろこ）

※ 動物園のおりの中との設定の話にもかかわらず野外の絵を描いたのはこの子のみ。話を聞いてみると、どうやら、サファリパークに行った経験かららしい。さらに、これは、本人ががけの上からながめおろしているところだと言う。なるほど、さくが外向きに描かれ、象は上からみたように描かれている。

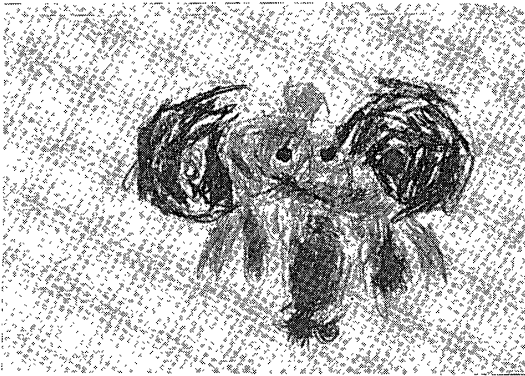


写真9 しっぽのけがが痛くてふんばっているところ（じゅん）

※ 「先生これ象だからね、ぶんた君だからね」としっこく念を押して持ってきたのは、最後の方である。きけば、2～3日前にみた。TVの動物番組でアフリカ象などを見て茶色の象が強く印象に残っていたためらしい。みんなが灰色に象をぬっているのに気づき、本人は、ひじょうにあわてたらしい。

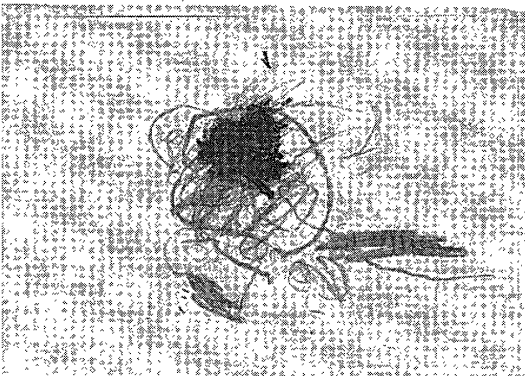


写真10 ぶんたくんが泣いている顔（しんや）

※ 何事も3才児程度の扱いをしなければならぬ男の子の絵。とにかくじっとしていられず、ただかきぐるぐらいがせいぜいのような絵しかかけないでいるような子である。よく、聞いてみると、ぐちゃぐちゃにぬったのは、えんえん泣いていてなみだがいっぱい出たかおがぐちゃぐちゃになっているからというような意がつかめた。

二、反省と評価

「言葉は、良くも悪くも武器になる。」と言う一言が、ふと脳裏に浮かんた。いつ、どこで、誰によって聞き覚えたフレーズであっただろうか。親によってか、それとも一人読みあさった書物の中の一行によってか。多分、それもある。しかし、もっと近い時間の中で強く繰り返され耳にしたのではないのか。そうだ、一年の言語の講義時間だったような…。

二回目の幼稚園実習のさ中、数日後に迫った全実習の為に、自らの立てた指導案を再検討していて、少しの間そんなことをあれこれとっていた。一斉保育で取り上げる領域に言語領域を選んでいて私は、思いのまま二、三の指導案を立て、実際にはどれを実施に移せば良いものかと悩んでいたのだが、「武器になる。」との一言が思い浮かんたことで、不思議にも決断がついた。自作の紙芝居も紙人形劇も試みて幼児の反応を見たいと考えていた、一種の自己顕示欲に似た未練が嘘のように消え去り、素話によるイメージ画を主題とした指導案を行なうことに踏み切ったのである。絵にも人形にも頼らず、言葉のみの表現で子供達と接してみたいと思った。もちろん、一斉保育に限らず、子供達と話しはしていたが何かこうもっと違う意味合いで、言葉で接したいと思った。反面、どうせおもしろお

かしく聞かせてやれば済むことだから一番簡単なことだ、という意識が無かったと言えば嘘になる。相手は子供—この思いもわずかながらこびりついていたようだ。のちに、この考えの甘さの為に後悔すべき反省点が数多く出てくる破目になるわけだが、この時は、それでも一応「素話」の指導案に目をすべらせる位のことはしたのである。又、これも後日談ではあるが、私は担当しようとしている五才児三十五名が、実はただの一度も、素話を聞いてそのイメージ画を描くなどという経験をしていない事実を知らぬままに、全く安易とも言える指導案の鵜呑みに躍起となっていたのだから、始末が悪い。教材を子供におろすにあたっては、教師自らの研究を充分に行ない教材そのものの把握はもちろん、興える時の環境にも細心の配慮を要すると幾度となく助言いただいたにもかかわらず、私はものの見事にその配慮を欠いたのである。素話を終え数人の子供たちがこちらの絵を描かせるという意図をくみとってくれたのを良いことに、イメージづけに重きをおくべきところ、それをなさずにいきなり描きの段階に入ってしまったのだ。その為に、隣りのお友達のまねっこをしてしまう子も何人か出ることにあいなった。素話そのものに山場をつけて興味をそそるように聞かせるのももちろんとは言え、このような指導の場合、要所を捕えたイメージの植えつけを的確にしてやらなければ、せっかくの子供たちの感動を子供たちが描ききれずにもどかしい思いをさせることになるのだと痛感した。

さて、それぞれ描き終えた絵について、子供一人一人に話しを聞いてみたのだが、大きく三分類のパターンがあることに気づいた。素話だけの内容を忠実に捕えて表現してみせる子、主人公のアップに重点をおいて描く子がひとつ、こちらの行なった素話の内容を自分なりに発展させて想像をあわせて描き入れる子でふたつ。そして、つい最近自分が経験したり見聞したりしたことを加味して描く子である。よって、中には一見して素話のイメージ画には該当していないかに思われる絵もあるのだが、話しを聞いてみると、その子なりの物語が画面に含まれているのを知ることができ、これは私に言い知れぬ感激をいだかせてくれる出来事だった。

今になって振り返れば、「五感に訴え得る導入」を心がけ、導入部で、素話の主人公となるぞうの大きなぬいぐるみを、お客さまと称してなぞなぞ遊びの中から登場させ、全員に触れさせたり、ぞうの体型の観察をおもしろおかしくさせた点が、話のイメージをつかみそこねた子にも大きく作用していたからこそ、そしておぎなってくれたからこそ、三十四名があれだけの素晴らしい絵を描いてくれたのではないかとさえ思う。私自身の話し方の方法と言うよりも、ぞうのぬいぐるみの功績大なりといったところかもしれない。又、そのぬいぐるみが実はぶんたという名だと言って子供たちを驚かせたり、ほうたい、薬のびんなどといった小道具を用いて話しをしたことにも助けられていたと思う。もし、これ

らがなかったら、子供たちはイメージ画にもっと手間取っていただろうと思えるのである。

できた絵を手に、生き生きと私にその場面内容を語る子供たちの表現と口調を忘れることはできない。その時、間違いなく私に向けて、思いのありったけを話して聞かせてくれた時間は、貴重な宝物である。(今史代)

IV 結

子どもは「お話」が大好きである
また、テレビも好きである。しかし
「お話」や「ほん」とテレビという
二種類のメディアにはいくつかの異
った特徴が右図のようにみられる。

話の選択についても、お話の方が、
テレビよりもはるかに広く作品をえ
らぶことが出来、子どもの興味や発
達段階により対応することができる。

お話をえらぶことは、まず作品全
体のねらいがはっきりしていること
である。

そこから一つ一つの場面の〈ねら
い〉を定め、その〈ねらい〉を果た

すためにどこを〈てがかり〉にするか、そしてその〈てじゅん〉はどうかという順序が必要となる。

この順序からいくと、「ぞうのぶんた」の素話とそのイメージ画へと導いていった日案の立て方と実習ぶりには、敬意を表したい。

幼児期の子どもたちには、ことばと行動(この場合は絵画)を通した思考訓練が必要な時期である。

しかし、指導者の過剰意識は、子どものゆたかなことばのひろがりや想像性をかえって阻害するおそれがある。この意味において、素話のイメージ画を描かせたことは、素話そのものの〈ねらい〉において、果して、よかったのかと一考してみる必要がありはしまいか。

一つの体形を求めたり、型を借りるということは、具体的で明瞭な長所もあるが、それ

「ほん」とテレビのメディアの特徴

	「ほん」 (ききよみを含む)	テレビ
疑問の処理	質問内容に応じて適切に回答	そのまま放置
反 復	可	不可
身近な人の意見	あ る	ない
主たる選択者	親または子ども	子ども
作品の展開速度	子どもの理解の 程度にあわせて	子どもの理解に 無関係
享 受 の 時 間	いつでも	放映時間
享 受 の 場 所	どこでも	茶 居 の 間

だけに、いわゆる定着的、限定的になりやすいものだ。

「形」とは、空間を占めることであり、「空間を占める」とは、物事を一定づけることである。「一定づける」とは、すなわち、その位置やパターンを制限することである。

与えるものと受けるもの、すなわち、話し手と聞き手の間に、何の介在するものもない、ただ言葉による、抽象的な口から耳への「お話」は、話し手の表現も聞き手の受け入れも自由自在である。しかし、幼児の場合には何らかの＜てがかり＞が必要であろう。

その＜てがかり＞に、なったのが、素話「ぞうのぶんた」の象のぬいぐるみにあたる。

お話をする場合には、そのねらいにしたがって、主題と思想の明確性のあるものをえらびたいものである。そして、非常に高いヒューマニズムと、人間へのかぎりない愛と正義に貫かれた天地万物の創造者にいたるまで、広く深く、豊かなものでありたい。

教師のその＜ねらい＞により、＜てがかり＞が生まれる、その＜てだて＞を選ぶことが子どもの興味を持続させることである。

その＜ねらい＞との関係で、自然的に＜てだて＞にも変化が出てくるものといえよう。

しかし、子どもにとって、何が必要なのか、子どもたちの気持ちを把握するためには、どうすればよいか……一つの決まったものはありえない。

ただ、あせらずに子どもの成長に合わせて、祈り心をもって、自ら子どもをよく観、よく学ぶ以外にその導き手はないと思う。

おわりに、今淵史代さんのご協力を深く感謝し、今後のご健康とご活躍をお祈りし、写真の労をとっていただいた学務の阿部久佐先生にもこころからのお礼を申し上げます。

註

註1 ビューラー Büh'ler 1) Charlotte Bertha 1893. 12. 20-1974. 2. 3. ドイツの女流心理学者。3) の妻。ウィーン大学教授(1921 来)。ナチス政権下に亡命し(39), ロンドン大学教授(39), ついでアメリカに渡り、カリフォルニア大学教授。初め文芸学的研究や、童話、青年男女の日記、新生児の行動の研究、特にその社会性発達の研究を行う。アメリカの調査方法とドイツの実験方法とを結合し、人格全体の発達を重視し、人間の一生を有名人の伝記その他の研究から総合して、これを5段階に分けた。また彼女の乳幼児のテストは我国で標準化された。

〔主著〕Das Märchen und die Phantasie des Kindes, 1918; Das Seelenleben der Jugendlichen, 1922; Kindheit und Jugend, 1928; Der menschliche Lebenslauf als psychologisches problem, 1931; From birth to maturity, 1935; Prak-tische Kinderpsychologie, 1937; Prak-tische Kinderpsychologie, 1937; Kind und Familie, 1938.

註2 シュプラングァー Spran'ger, Eduard 1882. 6. 27-1963.9.17. ドイツの哲学者、教育学者。ベルリン大学でディルタイ、パウルゼンに師事、ライプチヒ(1912), ベルリン(20), テュービンゲン(46)の各大学教授。初めディルタイに負うところ最も多く、これに(J.J.)ルソ

ーの教育説, リッケルトの価値哲学の影響を受けたが, 現実の文化, 教育政策と関連して思想を発展させた。これらを通じて個性の価値と, 個性に係わる超個人的価値連関とを強調し, 人間存在の主要類型を明かにしようとし, このような一般的文化哲学の上に心理学と教育学とを樹てた。

〔主著〕Rousseaus Kultur-ideale, 1908; Wilhelm von Humboldt und die Humanitätsidee, 1909; 生の諸形式 Lebensformen, 1914; Kultur und Erziehung, 1914; Kultur und Erziehung, 1919; Psychologie des Jugendalters, 1924; Entwicklungspsychologie, 1942; Kulturpathologie?, 1947.

註3 ペロー Perrault / 1) Charles 1628.1. 13-1703. 5.15. フラフスの詩人, 批評家, 童話作家。恋愛詩やキリスト教的叙事詩《Saint Paulin, évêque de Nôle》等を書き, アカデミー会員となり(1670), 制度改革に新機軸を出し, 更にレイ十四世*およびアカデミー会員を前にして読んだ《レイ十四世の世紀 Siècle de Louis le Grand》の詩篇は, 近代人が古代人より優れているとして現世紀を讃え, これに対し(N.)ボウロー*が反撃の諷刺詩を発表して一大文芸論争となった(87)。これが18世紀初頭まで持ち越され, 進歩の思想, 歴史的相対主置の近代的観念の自覚を準備した〈新旧論争 Querelle des anciens et des modernes〉であり, 彼は《古代人と近代人の比較 Parallèles des anciens et des modernes, 1688-97》を書いた。作家としては, むしろお伽噺集《仙女物語(昔話, 鷺鳥おばさんの話) Contes de ma mère l'Oye, 1697》の作者として知られ, 同書は, 〈赤頭巾〉〈シンデレラ〉などの口碑伝説を古典的典雅・平明な文章で語り, この種のものの傑作とされる。

註4 ブライアント Bryant, William Cullen 1794. 11. 3-1878. 6. 12. アメリカの詩人, ジャーナリスト。ポー*流の諷刺詩《The embargo, 1808》を作った後, (Th.) グレー*などに近い詩風となり, 死の問題を歌った瞑想詩《死観 Thanatopsis, 1811》《水鳥に寄す To a waterfowl, 1821》などを発表し, 当時までのアメリカ詩壇の最優秀作と評価された。弁護士(1815-25)からジャーナリストに転身し, ニューヨークの〈イヴニング・ポスト〉紙の主筆を死に至るまで50年近く勤めた(29-78)。穏健な自由主義者。

註5 カザー Cath'er, Willa Sibert 1876. 12. 7-1947. 4. 24. アメリカの女流作家。ネブラスカ州に育ち, 同地へ移住したスカンディナヴィアおよびベーメンの移民の運命や, また精神的な開拓者達を心理的, 写実的な手法で描写している。〔主著〕O pioneers! 1913; My Antonia, 1919; One of ours, 1922 (ピューリツァー賞); A lost lady 1923; The professor's house, 1925; Death comes for the archbishop, 1929; Shadows on the rock 1931; Not under forty, 1936; Sapphira and the slave girl, 1940.

参 考 文 献

1. 幼児の喜ぶお話の本, 3~4才, 大日本図書, 昭和45年
2. 幼児に聞かせたい, お話12か月, 第3巻, ひかりのくに, 1974年
3. 岩波西洋人名辞典, 増補版, 岩波書店, 1981年
4. 児童文化, 滑川道夫・中川正文編, 東京書籍